

現代文における品詞の比率とその増減の要因について

樺 島 忠 夫

従来、言語現象を考える場合に、場面という概念を導入する事によって多くの便宜が得られるのであるが、実際に場面がどのように作用するかはあまり詳しく調査されていないようである。

そこで場面と言語との函数関係を解析するための緒口として、現代文における品詞（但し自立語のみ）の割合はどうであるか、およびこの品詞の割合はいかなる条件によって変化するかという事を考察する。

一

まず、助詞・助動詞以外の、所謂自立語と総称される品詞（名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・感動詞・接続詞）はいかなる割合で現代文の中に含まれているかを調査してみる。

たゞし、現代文といっても種々あり、内容や条件が異なる文章は品詞の割合を異にするかもしれないから、一応考えられる条件、内容によって種類別けをして調査しなければなるまい。また同一種類の文であっても、文の長さが異なれば品詞の割合が異なる事も考えられるから、文の長さ別に品詞の割合を調べるのが妥当であろう。

そこで、内容あるいは条件の差を考慮して調査対象を日常会話、小説の会話、小説地の文、哲学書の文、新聞記事の五種類とし、各々三百の文を無作為抽出して、文節を単位とする文長、自立語である品詞の数を計って見た。（註一）

その結果は次のようであった。

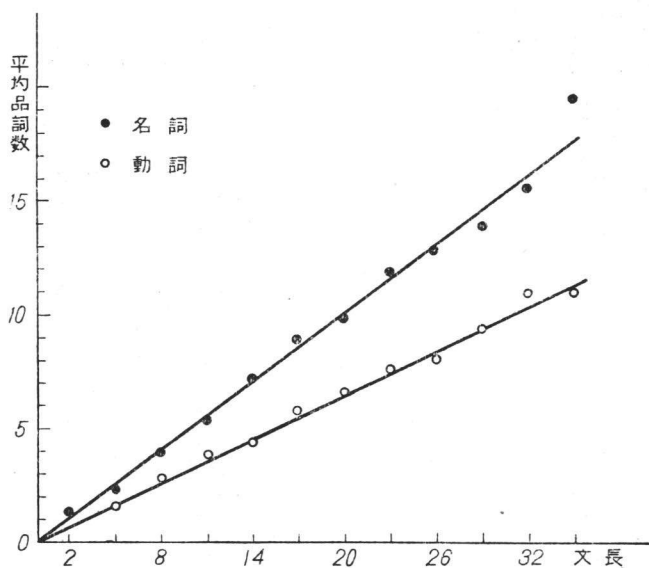
(イ) 同一種類の文において、品詞の割合は文の長さによって異なるらない。

例えば小説地の文に例をとってみよう。自立語のうち出現率が最も高いものは名詞であり、動詞がこれに次ぐ。他の品詞、即ち形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・感動詞・接続詞は出現率が非常に低い。

そこで出現率が高い、名詞及び動詞について、文の長さ（即ち文節数 \parallel 自立語数）とその文長における平均品詞数との関係を示すと第一図のようになる。

これによって、文長の増加につれ品詞数は直線的に増加している事、及びこの直線は、ほぼ原点を通るものである事がわかる。

即ち品詞の割合は文の長さの如何にかゝらず一定であると見てよい。この事は名詞、動詞以外の品詞についても言える事である。



〔第一図〕 小説地の文における文の長さと同平均品詞数との関係 (但し名詞および動詞のみ)

り、また小説地の文以外の種類の文についても見られる結果である。

従って、以下において文の長さ考慮に入れない名詞何パーセント、動詞何パーセントという一義的な表現が可能になる。

(□) 文の種類による品詞の割合の差

名詞、動詞以外の品詞は出現率が低いし、また多くの品詞の一つ一つについて比較する事は、煩雑である割に効果があるとは考えられない。従って、以下においては品詞を機能によって、次のように大別して観察する。

- 1 「何が、何を」を表わすもの……名詞
- 2 「どうする」を表わすもの……動詞
- 3 「どんな、どんなに、どんなだ」を表わすもの……形容詞、形容動詞、副詞、連体詞
- 4 右以外……接続詞、感動詞

以上の四種の百分率を文の種類毎に比較すると第二図のようになる。第二図の縦軸には品詞の百分率をとり、横軸には文の種類を記入したが、名詞の百分率に目をつけて、各種の文の名詞百分率を示す点が一直線上にならぶようにした。

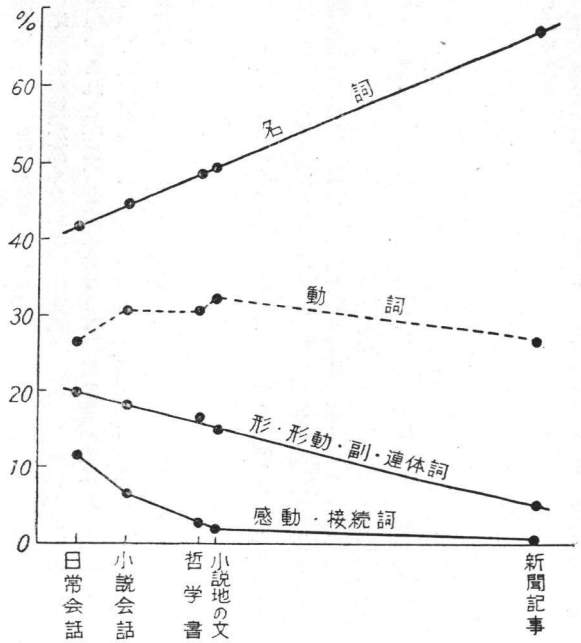
このグラフによってわかるように、文の種類によって各品詞の割合に差がある。しかも単に差があるだけではなさそうである。詳しく見てみよう。

一名詞の百分率を示す点が直線上に並ぶように横軸に文の種類をとったのであるが、面白いことに形容詞、形容動詞、副詞、連体詞を合併したものの百分率を示す点もほぼ一直線上にならんでいる。そして名詞の百分率とこれらを合併したものの百分率とは反比例している。

動詞は増加しているとも減少しているとも言えない姿を示しているがこれも注目すべき現象であろう。

また感動詞、接続詞が話し言葉に多い事も見られる。調査によって観察された事は以上である。

二



〔第二図〕 文の種類別に見た品詞百分率

言語表現は表現対象を概念に分割して、この概念間の關係を示す事によってなされるのであるが、時枝博士が言われたように、比較的自由に主語、述語、修飾語になり得るものは名詞であり（日本文法国語篇六十九頁）名詞がなくては何についてのべているのかわからないのである。従って名詞の割合が、他の品詞よりも多くなっている。

所が我々が通達を行うのは言語だけに由るのではなく、言語以外の通路によっても理解がなされる。

理解量Uというものは、言語量Lと言語以外の通達手段との函数で表わされる。即ち

$$U = f(L, I)$$

こゝで言語以外の通達方法には何があるかを考えると、その最も主なもの「場面」である。例えば

① 「彼が泥棒したそうだ」「まさか、彼が……」

② 私は彼が泥棒するような人間ではないことを信じているから、彼が泥棒したといううわさを肯定する事が出来ない。

右②例において「……」の部分には言語としてはあらわれていないが、「彼が泥棒した」という文によって、「……」の部分で何を言おうとしているかを理解する事が出来る。

しかし、文脈あるいはその場面がない場合には「……」の部分は①のような表現をとらざるを得ないであろう。即ち場面（或いは文脈）依存度が高い場合には言語量は少くともすむのである。従って場面文脈依存度をCで表わすならば

$$U = f(L, C) = L \times C \dots \dots \dots (1)$$

と考える事が出来る。

以上の観測結果を見ると、品詞の割合には文の種類によって差があるのみならず、この差は規則性を示している事に気がつく。そこで品詞の割合の変化に作用する要因は何であるかという事が問題になる。

この問題を解明する第一の鍵となるものは、各種の文において出現率が最も高いのが名詞であるという事である。

また、こゝで言語量、特に文の長さについて考えてみよう。

文長があまり長くなるといふ事は、我々が文の要素間の関係を把握して、一つのまとまった観念を作りあげざる事困難にする。従つて一つの文があまり長くなる事は不可能である。しかし短い方には、このような制約は働かない。

そこで、これだけは是非のべなければならぬという要素をMとし、M以外の附加的な要素をNとすれば、一文中の要素Eは

$$E = M + N \quad \dots\dots\dots(2)$$

但し、 $0 \leq N \leq E$

場面依存度が高くなれば、(1)式によつて言語量は減少させる事を得、これと共に、(2)式におけるNの自由度が大になる。そして、(2)式のMにあたるものが主として名詞、Nにあたるものが形容詞・形容動詞・副詞・連体詞及び接続詞・感動詞であると考へられないであらうか。

このような考察の後に、先の第二図横軸にとつた文の種類系列をながめてみると、名詞の割合が増加する順序、日常会話、小説の会話、哲学書及び小説地の文、新聞記事の順は場面文脈依存度が高いものから低いものへという順序であることに気がつく。

即ち、日常会話においては、对人的直接性によつて、表情、身振り、現場、事物などの利用、及び話者聴者間にあらかじめ存在する理解の利用などが考へられる。小説の会話は日常会話の反映であるが、文芸作品の一部として整理されたものであり、日常会話のような無駄な言葉は記されず、この意味で書きことばに近いものである。

哲学書、小説地の文は場面を作る事を目的とするもので、自足

的自立的な性質をもっている。しかし、一つの文は他の文に依存する(文脈への依存)という事によつて自足的自立的な度合は幾分低くなつてゐる。

所が新聞記事は、読者は何か事件を知りたいという意欲はあつても、その事件の場面については何も知らぬ上に、それかといつて、多くの言葉を使つて詳しく記述する事は、紙面の制限があるので不可能である。このため場面、文脈ともに依存する度合が少く、自足的自立的な度合が強い。

このような場面文脈依存度の高低が、文長の制約と共に品詞の割合を変化させる要因の一つであると考へられるのであるが、各種の文の夫々の平均値が、やはり、日常会話、小説の会話、小説地の文、新聞記事の順で長くなつてゐる事(「国語学」第十五輯、拙稿「文の長さについて」参照)は、この推測をうらづけるであらう。

三

私は以上において、文中の自立語の割合を決定する一つの要因として、文が言語表現以外の通達方法あるいは文脈を利用し得ず、自足的自立的であるためには、主要な概念項である名詞を省略し得ず、名詞の割合が大となる事。また、言語以外の通達方法あるいは文脈を利用し得る時は、主要な概念項である名詞で表現されるものは、言語的表現をとる事なく理解される度合が増加し、このゼロの部分に、副次的概念項を含む余裕を生じて、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・感動詞及び接続詞の割合が増大する事を、文長の制限的ワツクの中で考へてみた。

この事を比喩的に言えば、物価が一定であって、収入の絶対量が小さい時には食費のように生活に欠く事が出来ないものの占める割合が多くなるが、収入が増加すれば、娯楽費や教養費の割合が多くなる事にたとえられ、食費にあたるものが名詞、娯楽費・教養費にあたるものが形容詞などであると考えられよう。

この仮説を検討するために模型的実験を行ってみよう。

生活費の場合であれば物価を一定にしておいて、収入を大にしたり小にしたりすればよいわけであるが、言語の場合にも、同様に考えて、表現対象の大きさを一定にしておいて、それを表現する言語量を大、あるいは小にして、品詞の割合を測定すればよい。そこで具体的には次のような実験を行ってみた。

まず表現対象として次の文章を定める。

王様は或日御殿で賑かな宴会を門っていた。

それは夏の夕方のことだった。広い美しい庭の噴水の傍に立派な椅子を出して王様はいく気持で椅子にもたれて庭の景色を眺めたりお酒を飲んだりしていた。その傍には大勢の王様のお気に入りである家来たちが王様の御気嫌をとりながらひかえていた。

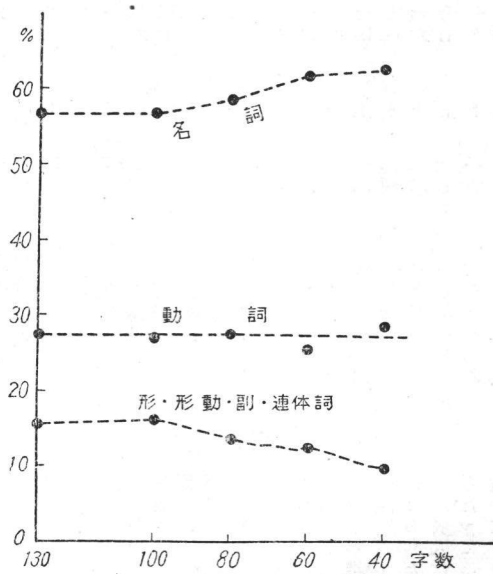
これは名詞五六・八%、動詞二七・三%、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の合併十五・九%、総文節数四四、文数四、総字数百三十字の文章である。

言語量は字数を目あてとし、被験者に、百字、八十字、六十字、四十字の文章に書きあらためさせる。但し重要な語はなるべく省略しないという条件を設けておく。

被験者は高等学校生徒百十五名で、制限に対する人数のわりあり

ては無作為に行い、百字二十七名、八十字三十名、六十字二十八名、四十字三十名となった。

結果は第三図に示したように字数を制限すればするほど名詞の百分率は増加し、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞を合併したも



〔第三図〕 制限による品詞の割合の変化

のは減少し、動詞の百分率はほぼ一定となっている。これを第二図の観察結果と比較してみると全く同じ結果となっている事がわかるのである。(註2) 従って先にたてた仮説は否定されない。

結 び

以上において考察した所から、文中における品詞の割合を決定

する一要因が明らかになつたと思われるが、これを一言で言うならば文の凝縮度という言葉であらわされようか。

即ち文には凝縮度の高いものと低いものとがあり、場面依存度が低いものには凝縮度が高いものが多く、場面依存度が高いものには凝縮度の低いものが多く見られる。

この事は和歌と俳句についても考えられ、字数が少い俳句は和歌に比して名詞が多いことを波多野完治氏は調査されている(文章心理学入門「和歌と俳句」)。

この稿を終るにあたって、私が調査した範囲で凝縮度の両極端にたつ新聞記事と日常会話の例をあげておこう。

○十八日午前九時ごろ大津市石山寺辺町旅館「数月」に前夜から投宿していた若い女の二人連が部屋で睡眠薬を飲み、苦しんでいるのを女中が発見、日赤大津病院で手当をしたが、一人は同夜六時半ごろ死亡、他の一人も生命危篤。(新聞記事の例)

○帰ッテ来テサ、帰ッテキテネ、エー、何月ダカ、七月ダカ、八月ダツタンダネ、シカモ十一月ニ、モウ十二月ニ、始マツタンダカラ、三月ダカ、四月アルカネ……………

(日常会話の例「言葉生活」//録音器//より)

(註1) 日常会話は「言語生活」//録音器//を資料とした。

(註2) 制限による文の長さ及文の数の変化は次の通りである。

制限され た字数	文の数				平均文数	
	4	3	2	1	(原文章四文)	(原文章一文 平均十一文節)
百字	5	12	10	0	二・八	十二・三文節
八十字	2	9	15	2	二・三	十二・五〃
六十字	0	4	14	12	一・七	十二・一〃
四十字	0	2	16	10	一・五	十・四〃

国語学第十五輯拙稿「文の長さについて」に於いて観察した結果と同じである。